

# 平成14年度事業報告書

自平成14年4月1日 至平成15年3月31日

社団法人 日本ゴム協会

## 1. ゴム業界情勢

### (1) 生産

2002年のゴム製品の生産(新ゴム消費量)は、1,434千トン、前年比104.0%になった。当年は、全体の82%を占める自動車タイヤが北米向けを中心とした輸出の増加により1,172千トン(前年比106.3%)と前年実績を上回った。また、ゴムホース(同101.1%)が自動車用ホースの伸びで、前年水準を上回ったほか、防振ゴム(同105.2%)、スポンジ製品(同103.6%)、パッキン類(同100.4%)も前年比プラスとなった。他方、ゴムベルト(前年比92.2%)は主力のコンベアベルトの低迷が響いて、前年水準に及ばず、このほか、更生タイヤ用練生地(同96.1%)、運動競技用品(同95.5%)、医療用衛生用品(同95.1%)など多くの製品が前年実績を下回った。

### (2) 出荷

2002年のゴム製品の出荷金額は1兆9,153億円(前年比101.6%)で5年ぶりに前年比プラスになった。しかし、3年続けて、2兆円の大台割れとなり、過去最高時(1991年)の2兆3,900億円に対比すると、2割の減少となる。品目別では、自動車タイヤが全体の48%を占めて最も多く、9,209億円(前年比105.4%)に増加した(5年ぶりのプラス)。このほかで前年実績を上回ったのは、防振ゴム(同109.0%)、スポンジ製品(同105.1%)、ゴム底布靴(同101.0%)が挙げられる。これに対して、前年実績を下回ったのは、ゴムホース(同99.3%)、運動競技用品(同98.5%)、ゴム板(同96.7%)、ゴムベルト(同95.8%)、医療用衛生用品(同95.6%)、更生タイヤ用練生地(同91.1%)、総ゴム靴(同89.6%)などの品目となっている。

### (3) 輸出

2002年のゴム製品の輸出額は6,447億円(前年比112.2%)で2年連続の増加となった。主要品目別では、全体の6割強を占める自動車タイヤ・チューブは主力の米国向けの増加や円安により、4,076億円(前年比115.8%)と上伸した。また当年は、ゴムホースが北米やアジア等向けの自動車用ホースの増加により、同119.9%と全品目中、最高の伸び率となった。さらにゴム糸・ゴムひも類(同115.3%;マレーシア向けの輸出増)、ゴム引

布(同112.6%;米国や韓国等向けの増加)も2ケタの伸びを示したほか、ゴムベルト(同108.1%)、ガasket類(同105.6%)なども前年水準を上回った。他方、自転車タイヤ・チューブ(同79.1%)、運動競技用品(同79.0%)、医療衛生用品(同83.2%)、気泡ゴム製品(同88.1%)はそれぞれ大幅に減少した。

### (4) 輸入

2002年のゴム製品の輸入額は、1,895億円(前年比101.6%)に増加し、2年連続のプラスとなった。最大輸入品目は、自動車タイヤ・チューブで米国やインドネシア等東南アジアからの輸入増を反映し511億円(前年比104.1%)に上伸し、全体の27%を占め、次いでゴム底布靴類の307億円(同90.3%)で、16%のシェアとなっている。また当年は、気泡ゴム製品(前年比155.9%)がイタリアやタイからの輸入増により最も高い伸びを示したほか、ゴム引布(同123.2%;米国、フランス等からの輸入増)やガasket類(同116.1%;中国、タイ等からの増加)も前年実績を大幅に上回った。他方、自転車タイヤ・チューブ(同76.6%)とゴムベルト(同87.3%)は前年水準をかなり下回った。

### (5) 2003年の予測

2003年のゴム製品の生産は、新ゴム消費量ベースで通計は、1,476,800トン、前年比103.0%の予想となっている。

## 2. 本会の事業

平成14年度もゴムに関する基礎・応用研究の推進および標準化の国際化を積極的に展開し、これらの成果を会員へ伝達することにより学識向上・ゴム産業の発達に貢献できた。

本年度は本会の活性化すなわち会員にとって魅力あるゴム協会作り、ひいては財政の健全化を目指して活動してきた。特に①若手の企画・運営による産学共同研究を目指した「新世代エラストマー技術研究分科会」の立上げ、②エラストマー討論会において当協会として初めての“若手優秀発表賞”の設置、③標準化部会メンバーの派遣先である日本ゴム工業会・ISO/TC45国内審議委員会での各種案の積極的提案と第50回ISO/TC45国際会議(京

都)への協力, ④ホームページの定期的メンテナンスによる会員外も含めた情報発信の充実, ⑤IRC 2005 YOKOHAMAに向けた1stアナウンスメントの発行とIRCC誘致の働きかけ, ⑥将来の技術者生涯教育実施に向けた組織の見直し, ⑦文部科学省の公益法人に対する指導への迅速対応などを強力に推進した。また, 事務局や各種委員会に対する諸規定見直しやOA設備更新などによる組織の近代化・効率化も前年に引き続き進捗させた。

関係者各位のこれらの活動に対する諸々の新規提案や種々の効率化・経費削減努力さらには会員の皆様方の絶大なる協力のお陰で, 課題の財政健全化も予想を上廻る形で目標を達成することができた。

## 2.1 本部関連

本年度における三大大事は下記のとおり開催した。

行事名	会期	会場	参加者	備考
年次大会 (第69回通常総会)	5月23日(木) 23日(木) ~24日(金)	東京理科大学 # #	250名	発表件数 70件
懇親会	5月23日(木)	#	62名	
夏期講座	7月10日(水) ~12日(金)	淡路夢舞台国際会議場 #	74名	
ミキサー	7月10日(水)	#	58名	
エラストマー討論会	12月5日(木) ~6日(金)	愛知工業大学 #	153名	研究発表 50件 特別講演 1件
ミキサー	12月5日(木)	#	67名	

### (1) 2002年年次大会(第69回通常総会)

本年度は, 5月23日(木)~24日(金)の2日間, 関東支部を始め各支部の協力を得て, 東京理科大学・神楽坂校舎において開催した。

5月23日(木)会員総数2,253名中1,163名(委任状とも)の出席を得て開催され, 平成13年度事業, 決算報告および平成14年度事業計画, 予算など定款所定事項が承認された。

引き続き表彰式に移り, ゴム技術有功賞など各賞の表彰が行われた。今回の研究発表は, 全て口頭発表(70件)で行われ, 登録者総数は250名であった。

### (2) 夏期講座(第39回)

「フロンティア科学とゴム科学技術の融合」をテーマに関西支部の協力を得て, 7月10日(水)から12日(金)の3日間, 淡路夢舞台国際会議場で開催した。ゴム科学の発展に寄与し可能な先端科学をプログラムの中心に組み, マレーシアからも講師を招き74名の参加を得た。また, ミキサーにも58名の参加を得, 好評であった。

### (3) エラストマー討論会(第15回)

第15回エラストマー討論会が, 平成14年12月5日(木)~6日(金)の2日間, 東海支部の協力を得て愛知工業大

学において開催された。

特別講演1件と研究発表50件, 参加登録者総数153名(事前登録128名, 当日登録25名)であった。今回は, テーマとして(1)材料(2)製品と加工(3)その他を設定し(全部で14セッション), また新しい試みとした「若手発表者のコーナー」を設けたが, このコーナーには目標を大きく上回る26件の応募をいただいた。討論会は2日とも好天に恵まれ, A, B会場とも多数の聴講者を得, 活発な質疑応答が行われた。

そして, ミキサーに先立ち, 新設した「若手発表者のコーナー」の中から, 4名が優秀発表者として選ばれ, 竹村日本ゴム協会会長から栄誉ある表彰状と副賞が手渡された。

ミキサーへは67名が参加し, お互いの交流を深め合った。

### (4) 会員増強および会員移動

本年度は, 2~7月に支部長以下支部幹事を中心とした会員増強キャンペーンを実施し, 期間中103名の入会者があった。しかし, 残念ながら年間では退会者数が上回り正会員数は減少となった。次年度は今年度に引き続き正会員を増強する活動を組織的に展開していくこととした。

会員種別入退会表

会員種別	前年度末	本年度入会	本年度退会	本年度末	
正会員	2,253	191	250	2,194	
学生会員	32	27	13	46	
海外会員	37	0	5	32	
名誉会員	11	2	0	13	
賛助会員	社数	375	10	12	373
	口数	771	10	15	766
計	2,708	230	280	2,658	

### (5) 規格委員会

日本ゴム協会の団体規格であるSRISは, 2003年度末に全廃の方向で活動し, 2003年3月末現在2件となっている。今年度の成果はなかった。

### (6) 総務・人事委員会

4年前より, 事務局諸規定の見直しを行い主要18規定の見直しが完了した。以後2年に1回は見直しを行い生きた規定としたい。

### (7) 組織委員会

定款・細則に対応する主要な規定, 内規(各委員会, 研究部会等)の整備をほぼ完了した。今後定期的に見直ししていく。一方, ゴム協会の活性化対策として, 今年度から支部および本部合同による三大大事の活性化活動を展開中である。今年度の新たな活動として, エラストマー討論会における若手表彰を行い, これは年次大会でも継続

する。また年次大会ではポスターセッション、展示なども実施する。さらに研究部会との連携での活動も行っていく予定である。

(8) 広報委員会

本年度は日本語版ホームページの充実とメンテナンスを中心に活動した。残された課題は、①日本ゴム協会誌の解説・技術資料・特集・論文の英文要旨の掲載(編集委員会との共同)、②英語版の具体化である。

(9) 事業運営のための会合開催状況

会合名	開催数
年次大会(第69回通常総会)	1
監査会	1
理事会	7
評議員会	3
会員委員会	1
編集委員会	12
出版企画委員会	—
財務委員会	—
国際委員会	3
ゴム技術進歩賞委員会	2
優秀論文賞推薦委員会(書面審議)	2
ゴム技術有功賞委員会	1
科学技術奨励金委員会	1
日本ゴム協会賞委員会	1
オーエンスレガー賞委員会	—
次期役員、評議員候補者選考委員会	3
ゴム技術資料保存委員会	—
組織委員会	2
総務・人事委員会	13
広報委員会	—
規格委員会	—
名誉会員推薦委員会	1
年次大会運営委員会	2
夏期講座運営委員会	3
エラストマー討論会運営委員会	2
計	61

2.2 支部関連

(1) 会員増強運動

各支部における会員増強運動は、会員委員会の方針に則って各支部の実情を考慮して支部独自の考えで推進した。

(2) 各支部の諸行事と活動状況

各支部では、毎月適切なテーマをとりあげて講演会、講習会、見学会、セミナーなどを開催した。そのほか関東支部では(財)化学物質評価研究機構との共催による第33回初級ゴム技術研修会を開催した。

各支部における主な会合は次のとおりである。

各支部の主な会合開催状況

支部	会合名	開催数	支部	会合名	開催数
関東支部	支部総会	1	関西支部	支部総会	1
	常任幹事会	3		常任幹事会	1
	幹事会	5		合同役員会	2
	講演会	3		幹事会	3
	紹介講演会	1		サタデーセミナー運営委員会	6
	アドバンテックセミナー	1		秋期講演会委員会	2
	若手会員セミナー	2		講演会	7
	講習会	2		総合紹介講演会	1
	見学会	2		講習会	1
	会員懇親会	1		見学会	1
技術研修会(共催)	1	関西ゴム技術研究所	1		
東海支部	支部総会	1	九州支部	支部総会	1
	合同幹事会	2		合同幹事会	3
	常任幹事会	7		常任幹事会	7
	講演会	5		研究・事例発表会	1
	講習会	1		紹介講演会	1
	見学会	1		秋期講習会	1
			ランポイントセミナー	1	
			先端技術講演会	1	

2.3 標準化部会関連

日本ゴム工業会ISO/TC45国内審議委員会のWG10(用語)、SC1(ホース)、SC2(物理・分析)、SC3(原材料)、SC4(ゴム製品)に対応する分科会メンバーとして、対応するJISおよびISO規格の立案ならびに改正案の作成を実施した。平成14年度はISO活動に重点をおき、年間会合数162回(当協会の標準化部会関係は下表の通り)、ISO規格121件に対し日本からの提案30件の多きを数えた。特に10月13日(日)～18日(金)に我が国で初めて開催された記念すべき第50回ISO/TC45国際会議(京都)には大いに協力した。その結果参加国21ヶ国、参加者196名と過去最高を記録すると共に日本からの提案・改正要求案件30件中25件が次ステップに進展するなど、日本の国際的信頼性を高めることに成功した。特にJIS 3号ダンベルのISO記載が認められたことは、大きな成果であった。

また、JIS関係では21件の改正・制定のため22回の審議を行い原案を作成した。

会合開催状況

会合名	開催数
幹事主査会	3
ISO分科会(標準化部会関係)ゴム工業会ISO/TC45国内審議委員会	73
計	76

2.4 研究部会関連

(1) 行事

研究部会では、下記のとおりシンポジウム9回、講習会1回を開催し、会員の研鑽に資した。

	テーマ	会期	会場	参加者
85シンポジウム	化学物質管理対策(CIPP)の最新動向 —PRTRからLCAまで—	6月25日	東部ビル	20
86シンポジウム	ゴムの接着 —ゴム接着における最近の関心—	7月31日	大阪科学技 術センター	57
講習会	ゴムの力学入門コース2002 —ゴムの力学的性質と有限要素法 への適用—	9月13日	東部ビル	34
87シンポジウム	ゴム練りの理論と現場の知恵Ⅲ —ゴム練りの哲学—	9月24日— 25日	東京電業会館	86
88シンポジウム	プレス成形加工における問題点と 現場から学ぶ知恵	10月17日	工学院大学	39
89シンポジウム	ゴムのトラブル解決のための分析技術 金型に対するニーズと関連技術の動向	11月8日	東京電業会館	47
90シンポジウム	ゴムのトライボロジーの基礎と応用	12月11日	東京電業会館	55
91シンポジウム	ゴムのトライボロジーの基礎と応用	平成15年 1月22日	東部ビル	35
92シンポジウム	エラストマー製品の寿命と信頼性 (基礎と応用Ⅱ)地球環境と劣化	2月6日	東部ビル	37
93シンポジウム	ゴム材料の高機能化と配合技術	3月4日	東京電業会館	50

### (2) 分科会報告書の発行

研究部会では、分科会活動成果のまとめとして、本年度は下記のとおり報告書を発行した。

- ・ ゴム製品食品用器具及び容器包装等に関するポジティブリスト(第4版) A4版 118ページ
- ・ トラブル解析文献抄録集 A4版 199ページ
- ・ エラストマーの耐久性研究Ⅲ(第3次共同研究報告書) A4版 74ページ

### (3) 会合開催状況

会合名	開催数
幹事主査会	2
衛生問題	6
環境劣化	4
ゴム練り	4
ゴム製品性能	4
配合技術	4
成形加工	4
トライボロジー	4
接着	4
分析	4
金型	4
新世代エラストマー技術	4
力学的性質	4
免震用積層ゴム	5
計	57

## 2.5 会誌・出版部門関連

### (1) 日本ゴム協会誌の発行

会員へのゴム技術情報提供および学術推進のための機関誌「日本ゴム協会誌」発行において以下の企画を推進した。

1. ゴム技術を中心に周辺技術や高分子材料に関するタイムリーな情報を提供した。
2. 会員啓蒙のため、ゴムの入門講座「やさしいゴムの化学」、「やさしいゴムの力学」の企画を検討し、「やさしいゴムの化学」のシリーズ掲載を開始した。
3. ゴムに関連する今日的なテーマで特集を組み定期的に

に発行した。

4. わが国唯一のゴム論文誌として、高いレベルで迅速審査、迅速発行を図ると共に、紙面の構成を刷新し、論文特集号を発行した。
5. 論文および解説等のリファレンスの英字化、英文アブストラクトの解説等への添付などの国際化と海外評価を意識した企画・編集を行った。
6. ゴム技術に関する豆知識を継続した。
7. エラストマー討論会の研究発表やIRC, IRCC, あるいはISO/TC45国際会議などの海外におけるゴム関連の参加記を掲載し、会員への情報提供に努めた。
8. 論文誌、インターナショナルジャーナル等の発行に関する検討を行った。
9. ゴム協会誌の呼称について検討した。

### (2) 書籍の出版関係

「新版 ゴム試験法」の改訂を検討した。

日本ゴム協会誌・第75巻第4号～第76巻第3号

#### 目次内容

項目	件数	ページ数
巻頭あいさつ	2	2
参加記	5	14
研究論文(ノート, 速報含)	16	86
資料(解説, 特別解説, 技術資料含)	23	117
特集 ナノコンポジット(4号)	10	48
特集 ゴムの破壊(6号)	11	52
特集 難燃化(8号)	14	50
特集 タイヤのトライボロジー(10号)	9	45
入門講座 やさしいゴムの化学	4	41
豆知識	6	29
総会報告		9
編集だより	9	9
紹介	9	9
案内		5
第75巻総索引(12号)		(4)
本文総ページ数		516
1冊平均ページ		43
会告		245
本文+会告総ページ		761
1冊平均ページ数(会告含)		63.41
広告(前付・中付・後付合計)		160
月平均広告ページ		13.5

## 2.6 国際部門

### (1) 国際ゴム技術会議日本開催(IRC 2005 YOKOHAMA)の準備

西敏夫元会長を組織委員長とし、2005年10月24日(月)から28日(金)にかけ横浜で開かれるIRCの準備を進め、1stアナウンスメントを発行(IRC 2005 YOKOHAMA広報・宣伝委員長 五十野善信)した。また各委員会を正式に発足させた。

### (2) 国際ゴム技術会議委員会2002 プラハ(IRCC 2002 PRAGUE)への代表派遣

IRC 2002 PRAGUE(2002年7月1日～7月4日)の会期中に開かれたIRCC(2002年7月3日)に、日本ゴム協会代表として西敏夫元会長および五十野善信氏を派遣し、2005年の横浜でのIRC開催を説明(1stアナウンスメント配布)した。また、横浜でのIRCC開催を要請した。

(3) 「アジアにおけるゴム技術」に関する調査

インドの呼び掛けで2002年11月30日にニューデリーで開かれたアジアゴムフォーラム(Asia Rubber Forum)準備会議に鞠谷国際委員長を派遣し、アジアゴムフォーラムの活動が開始された。同時に同フォーラムのもとでもジャーナル発行についての検討を行うこととした。

## 2.7 顕彰部門関連

当該各委員会において各賞受賞者の選考と推薦を行った。

## 2.8 外郭団体関連

### (1) ゴム技術フォーラム

#### 1. 例会行事について

平成14年度のゴム技術フォーラムの月例会は、採りあげる内容を必ずしもゴムにとらわれず幅広い分野から講師を招聘し開催した。

なお、ゴム技術フォーラムは1986年7月第1回月

例会を開催して以来、2002年7月の月例会をもって第200回を迎え、2002年9月13日(金)はあといん乃木坂において記念講演会を開催し、盛会であった。

#### 2. 調査委員会について

平成14年9月発足の「ゴムとナノテクノロジー」調査委員会(委員長鞠谷信三京都大学化学研究所 教授)は、WG 1(精密重合技術, ソフトマテリアル, ナノブレンド), WG 2(ナノコンポジット), WG 3(ナノ解析, ナノ成形)の各分科会において調査を継続し、去る3月27日開催の第16回公開フォーラムにおいて中間報告を行った。

#### 3. ゴム技術総合研究所について

昨今の経済状況のもとでは、糸口をつかめなかったが、構想実現に向けて世界29の研究所の現状を調査終了するなど準備を行った。

#### (2) ラテックスアレルギーフォーラム

実質的に活動の最終年度となるため、無料・公開の例会を開催し従来不足していた一般への啓発活動を強化した他は事業の拡大を行わず、今までに実施した事業の効果確認と臨床研究など継続事業の完遂を図った。例会開催3回、成果発表2件。

# 平成14年度決算報告

自平成14年4月1日 至平成15年3月31日

社団法人 日本ゴム協会

## 収支決算・貸借対照表・財産目録

### 1. 公益事業(一般会計)

前期繰越金	1,285,757円
本年度収入	84,802,269円
本年度支出	80,323,385円
日本ゴム協会賞基金繰入	1,000,000円
ゴム技術有功賞基金繰入	1,000,000円
ゴム科学技術奨励金基金繰入	1,000,000円
国際交流基金繰入	1,000,000円
次期繰越金	1,764,641円

### 2. 収益事業(出版物会計)

前期繰越金	5,405,781円
本年度収入	23,034,614円
本年度支出	20,879,272円
次期繰越金	7,561,123円

### 1. 収支計算書(公益事業)

#### 1 収支計算の部

(1) 収入の部 (単位 円)

科目	予算額	決算額	差異
会費収入	47,310,000	47,347,845	37,845
賛助会費	27,020,000	26,787,965	△232,035
正会費	20,090,000	20,271,330	181,330
学生会費	150,000	220,300	70,300
入会金	50,000	68,250	18,250
寄付金	460,000	460,000	0
広告料収入	11,970,000	12,079,200	109,200
バックナンバー収入	100,000	222,638	122,638
本部行事収入	6,310,000	7,039,350	729,350
年次大会収入	1,600,000	2,155,300	555,300
夏期講座収入	3,540,000	3,592,850	52,850
討論会収入	1,170,000	1,291,200	121,200
研究部会収入	11,230,000	13,004,562	1,774,562
委員会参加収入	2,230,000	2,502,012	272,012
行事収入	9,000,000	10,502,550	1,502,550
業務受託収入	2,700,000	2,950,000	250,000
雑収入	1,500,000	1,698,674	198,674
収入計	81,580,000	84,802,269	3,222,269

(2) 支出の部 (単位 円)

科目	予算額	決算額	差異
事業費	16,640,000	15,194,081	△1,445,919
会議費	1,000,000	773,836	△226,164
表彰費	440,000	434,000	△6,000
普及費	2,400,000	1,713,010	△686,990
旅費	1,700,000	1,863,060	163,060
通信費	2,000,000	1,716,453	△283,547
印刷費	700,000	759,815	59,815
消耗品費	300,000	286,530	△13,470
事務所費	4,500,000	4,066,477	△433,523
支部費	3,600,000	3,580,900	△19,100
本部行事費	5,850,000	5,730,066	△119,934
年次大会費	1,500,000	1,218,372	△281,628

夏期講座費	3,250,000	3,353,079	103,079
討論会費	1,100,000	1,158,615	58,615
雑誌費	15,200,000	13,293,599	△1,906,401
編集費	1,800,000	1,617,783	△182,217
印刷費	9,000,000	7,842,220	△1,157,780
発送費	3,400,000	2,907,485	△492,515
原稿料	1,000,000	926,111	△73,889
研究会費	8,800,000	9,065,916	265,916
会費	2,800,000	3,015,795	215,795
行事費	6,000,000	6,050,121	50,121
人員費	29,720,000	28,721,041	△998,959
職員給料	18,800,000	18,572,617	△227,383
職員手当	5,800,000	5,144,110	△655,890
厚生費	3,500,000	3,393,608	△106,392
通勤費	950,000	946,206	△3,794
中退金	670,000	664,500	△5,500
事務費	2,300,000	5,981,660	3,681,660
雑費	500,000	386,862	△113,138
国際交流費	900,000	750,000	△150,000
公租公費	1,200,000	1,200,160	160
予備費	470,000	-	△470,000
支出計	81,580,000	80,323,385	△1,256,615

### 2. 貸借対照表

(平成15年3月31日現在)

(単位 円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
定期預金	51,017,424	基本基金	4,000,000
普通預金	5,419,243	日本ゴム協会賞基金	5,777,778
振替貯金	461,912	ゴム技術有功賞基金	3,228,608
退職積立預金	14,667,072	ゴム科学技術奨励金基金	4,977,483
仮払金	11,841,956	国際会議基金	10,812,666
未収入金	2,034,900	国際交流基金	4,502,961
現金	429,527	研究準備基金	6,208,841
事務所保証金	1,200,000	OR賞基金	279,625
		退職積立金	14,667,072
		別途積立金	6,738,928
		仮受払金	3,334,271
		未払金	1,295,170
		会費前受金	19,483,990
		繰越剰余金	1,285,757
		剰余金	478,884
合計	87,072,034	合計	87,072,034

### 3. 財産目録

(平成15年3月31日現在)

(単位 円)

科目	金額	備考
定期預金	31,897,693	三井住友銀行日比谷支店
定期預金	10,086,275	三井住友銀行日比谷支店(国際会議基金)
定期預金	3,032,855	三井住友銀行日比谷支店(国際交流基金)
定期預金	6,000,601	みずほ銀行虎ノ門支店

普通預金	1,832,292	三井住友銀行日比谷支店
普通預金	726,391	三井住友銀行日比谷支店(国際会議基金)
普通預金	470,106	三井住友銀行日比谷支店(国際交流基金)
普通預金	345,365	三井住友銀行日比谷通支店
普通預金	714,241	東京三菱銀行虎ノ門公務部
普通預金	1,330,848	みずほ銀行虎ノ門支店
振替貯金	461,912	振替口座 00190-1-48393
退職積立預金	14,667,072	三井住友銀行日比谷支店
仮払金	11,841,956	出版部他
未収入金	2,034,900	協会誌広告料収入他
現金	429,527	手許現金
事務所保証金	1,200,000	東部建物
合計	87,072,034	

#### 4. 正味財産増減計算書(公益事業)

##### I 資産の部

(1) 増加額 (単位 円)

振替貯金	83,003	
退職積立預金	7,183	
増加額合計	90,186	

(2) 減少額

定期預金	975,386	
普通預金	5,284,670	
仮払金	849,314	
未収入金	7,350	
現金	27,057	
減少額合計	7,143,777	

##### II 負債の部

(1) 増加額

仮受金	2,308	
増加額合計	2,308	

(2) 減少額

未払金	289,320	
会費前受金	381,635	
減少額合計	670,955	

##### III 正味財産の部

当期正味財産減少額	6,384,944
前期繰越正味財産額	69,343,547
期末正味財産合計額	62,958,603

#### 5. 収支決算書(収益事業)

(単位 円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
出版物収入	4,590,395	出版費	1,268,765
新版ゴム技術の基礎	2,224,458	印刷費	0
ゴム試験法	68,335	会議費	90,781
ゴム工業便覧	1,806,350	通信費	192,155
ゴム用語辞典	491,252	事務所費	659,010
広告料収入	0	消耗品費	31,836
会員外購読料収入	1,684,430	発送費	87,977
雑収入	8	旅費	207,006
期末在庫商品	16,759,781	人件費	3,809,078
		職員給料	2,489,877
		職員手当	837,000

		厚生費	377,067
		通勤費	105,134
		雑費	113,509
		期首在庫商品	15,687,920
		剰余金	2,155,342
合計	23,034,614	合計	23,034,614

#### 6. 貸借対照表(収益事業)

(平成15年3月31日現在)

(単位 円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
普通預金	251,437	未払金	9,701,996
現金	251,901	繰越金	5,405,781
在庫商品	16,759,781	剰余金	2,155,342
合計	17,263,119	合計	17,263,119

#### 7. 正味財産増減計算書(収益事業)

##### I 資産の部

(1) 増加額 (単位 円)

現金	167,389	
在庫商品	1,071,861	
増加額合計	1,239,250	

(2) 減少額

普通預金	412	
減少額合計	412	

##### II 負債の部

(1) 減少額

未払金	916,504	
減少額合計	916,504	

##### III 正味財産の部

当期正味財産増加額	2,155,342
前期繰越正味財産額	5,405,781
期末正味財産合計額	7,561,123

#### 8. IRC 2005 YOKOHAMA 収支決算書

平成14年5月1日～平成15年3月31日

(単位 円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
交付金	10,000,000	会議費	113,525
雑収入	620	印刷費	558,600
		旅費交通費	262,765
		通信費	16,810
		消耗品費	11,896
		広報費	132,300
		雑繰越金	945
合計	10,000,620	合計	10,000,620

# 平成15年度事業計画

自平成15年4月1日 至平成16年3月31日

社団法人 日本ゴム協会

## 1. 年次大会

- (1) 2003年年次大会(第70回通常総会)の開催  
関西支部の協力を得て5月15日(木)～16日(金)の2日間、大阪市立大学・学術情報総合センターにおいて開催する。通常総会は慣例に従って行うが、事業報告をはじめ必要事項の承認、表彰式、記念講演、特別講演を行う。研究発表は、ゴム・エラストマー科学技術の更なる向上をめざし、口頭発表およびポスター発表を行うと共に、若手発表の部を設ける。また、新製品紹介コーナーも開催する。
- (2) 2004年年次大会(第71回通常総会)の準備  
平成16年5月中旬と予定し、東海支部の協力を得て準備と実施要項を計画する。  
今後の年次大会は、社会、経済、技術等の環境変化に則した大会内容を準備していく必要がある。

## 2. 会員増強運動

正会員・学生会員・賛助会員増強のための活動を展開する。特に4月1日から9月30日までを会員増強キャンペーン期間とし、関係者に対して一層の入会勧誘を行う。ゴム・エラストマーに関する研究・科学技術レベルの進展に貢献すると同時に、社会的ニーズ、新規性、領域拡大、有益性などを十分意識した魅力ある企画(シンポジウム・講演講習会、研究発表会など)を推進して、会員サービスとPRを行い、幅広い会員増加に結びつける。

## 3. 研究部会

研究部会では、活動の根本となる下記の4項目について、より深く追求してその成果を会員ならびに社会に還元する。

- (1) 広くゴムに関連する基礎科学、材料特性、設計、生産および評価の技術について調査研究を行い、その成果を我が国ゴム産業の発展に役立てることを目的とする。
- (2) 各研究分科会において、定期的に研究会を催し、最新の課題について討論する。
- (3) 研究分科会において得られた専門的成果に基づいて、分科会主催の講習会、講演会およびゴム技術シンポジウムを開催し、会員ならびに一般ゴム科学技術者の研

鑽に資する。

- (4) 関係官庁および関連団体の諮問に応ずる。

## 4. 標準化部会

ISO/TC45に対応するJISおよびISO規格の立案ならびに改正案の作成を日本ゴム工業会ISO/TC45国内審議委員会のWG10(用語)、SC1(ホース)、SC2(物理・分析)、SC3(原材料)、SC4(ゴム製品)に対応する分科会メンバーとして実施する。

平成15年度はJISの制定・改正が16件、ISOの審議は約110件であるが、その中の31件は日本が主体的に推進する案件である。

実施にあたってはISO国際会議への積極的な参画と提言、さらに関係官庁および関係団体の諮問に対する答申/連絡を心がける。

## 5. 三人行事

- (1) 研究発表会

会員によるゴム・エラストマーの科学技術に関する研究発表、討論の場として、口頭およびポスター発表を行う。若手およびベテランの研究者や技術者に相互啓発と交流の機会を提供して、協会の活性化と今後の発展を図る。

- (2) 夏期講座

第40回を7月9日(水)～11日(金)まで九州支部の協力を得て、長崎大学において開催する。今後の予定は、平成16年関東、平成18年東海とする(平成17年はIRC開催のため中止)。

- (3) エラストマー討論会

エラストマーの科学と技術の一層の発展と、特に若手研究者および技術者の充実した討論の場となることを期待して第16回を12月4日(木)～5日(金)まで関東支部の協力を得て、東京理科大学において開催する。今後の予定は、平成16年関西、平成18年関東とする(平成17年はIRC開催のため中止)。

## 6. 会誌および出版事業

- (1) 日本ゴム協会誌の発行

協会誌編集にあたって、基本的にはこれまでの基本方針を継承する。

会員へのゴム技術情報提供および学術推進のための機関誌「日本ゴム協会誌」発行において以下の企画を推進する。

1. ゴム技術を中心に周辺技術や高分子材料に関するタイムリーな情報を提供する。
2. 会員啓蒙のため、ゴムの入門講座「やさしいゴムの化学」を引続き連載する。
3. 今日的なテーマおよびゴム固有のテーマ等で特集を組み、定期的に掲載する。
4. 引続き特集号予告を前号会告に、特集号のキーワードを特集号と同じ号に掲載する。
5. わが国唯一のゴム論文誌として、高いレベルで迅速審査、迅速発行を図ると共に、論文特集号を企画し発行する。
6. ゴム技術に関する豆知識を継続して連載する。
7. エラストマー討論会の研究発表やIRC、IRCC、あるいはISO/TC45国際会議などの海外におけるゴム関連の参加記等を掲載し、会員への情報提供に努める。
8. 発行予定：年間12冊(普通号7冊、特集号5冊)資料、論文等：各号44頁×12冊=528頁、会告：各号17頁×12冊=204頁、年間総頁732頁。

#### (2) 出版関係

ゴムの技術に関する入門書、『ゴム試験法』改訂版の出版および実用書の新規出版物、英文論文誌の発刊の企画を検討する。

#### 7. 国際交流

##### (1) 国際ゴム技術会議日本開催(IRC 2005 YOKOHAMA)の準備

2005年10月24日(月)から10月28日(金)までの期間に「パシフィコ横浜」で開催されるIRC 2005 YOKOHAMAの開催準備に協力する。

##### (2) 国際ゴム技術会議委員会2003 ニュールンベルグ(IRCC 2003 Nürnberg)へ2名の代表を派遣し、IRC 2005 YOKOHAMAのアピールとIRCC誘致をはかる。

##### (3) Asia Rubber Forumメンバーとしてアジア地域を中心とした世界のゴム科学技術の発展に貢献する。今年度はフォーラムからのゴム技術ジャーナル発行の可能性について調査を行う。

##### (4) ゴム関連研究者、技術者の海外派遣。

#### 8. 顕彰関係

- (1) 日本ゴム協会賞：創立60周年を記念して設定されたもので、第15回の表彰と第16回の選定を行う。
- (2) ゴム技術有功賞：創立35周年を記念して設定されたもので、第41回の表彰と第42回の選定を行う。
- (3) 優秀論文賞：創立25周年を記念して設定されたもの

で、第50回の表彰と第51回の選定を行う。

##### (4) ゴム技術進歩賞：創立15周年を記念して設定されたもので、第58回研究課題の表彰と第59回研究課題の選定と募集を行う。

##### (5) オーエンスレーガー賞：昭和32年ゴム科学の権威故オーエンスレーガー氏を記念して設立されたもので、第24回の受賞者の選定を行う。

##### (6) 科学技術奨励金：創立50周年を記念して設定されたもので、第13回贈呈者の表彰を行う。

#### 9. 支部行事

関東、東海、関西、九州各支部において次のような諸計画を実施する予定で、その詳細については各支部に一任する。

##### (1) 初級および上級講習会

##### (2) 初級ゴム技術研修会(講義と実習)(関東)

##### (3) セミナー：若手会員の基礎技術と応用技術の修得を目的として年2回予定(関東)。

このほか、ゴム産業とハイテクの接点と可能性をポイントとしたアドバンテックセミナーを年1回実施する(関東)。また、若手および中堅技術者の基礎学力の向上と最先端情報が収集できるサタデーセミナーを年6回予定する(関西)。

##### (4) 講演会(技術講演、新製品紹介)

##### (5) 見学会

そのほか、各支部における地区活動として下記のとおり計画する。

関東支部：札幌、仙台、盛岡地区の会員増強を目的としての行事活動。

東海支部：名古屋市を除く東海地区におけるゴムの科学技術の普及と会員増強のための行事活動。

関西支部：広島、岡山、神戸地区での社会貢献と会員増強を目的とした行事活動。

九州支部：山口、熊本地区における行事活動と会員へのサービス向上と会員増強。

#### 10. その他

##### (1) 日本語版ホームページは定期的メンテナンスにより、会員および会員外への最新情報発信を行えるようになった。今後、海外(特にアジア)に向けての英文ホームページの作成を検討する。

##### (2) 本会組織の見直し、各種委員会規定、内規の整合化を更に進める。

##### (3) 三大行事の活性化を含めた新しい活動の提案を行いゴムの学術・技術の向上に寄与する。

##### (4) 事務局業務の効率化を進め、会員へのサービスの向上を図る。

## 11. 外郭団体の活動

### ゴム技術フォーラム

ゴム産業も周辺の経済状況がますます過酷度を増していく中で、技術力に活路を見出さなければならない。現在、進めている調査委員会活動は、国の重要技術課題の一つであるナノテクノロジーをゴムの分野でどのように生かすかを、調査し活用するところにある。ゴム技術フォーラムは、我が国のゴム産業の将来について会員ならびに学識経験者の協力を得ながら検討してきたが、更に広く海外の技術動向に目を向け、国の技術政策にベクトルを合わせ、我が国のゴム産業が目指すべき道をさぐることが重要で、このため、例会と調査委員会活動をこれまでどおり進め、その成果を公開フォーラムで発表するとともに報告書の形で関連の官学・業界に発信していく。

- ① 例会行事について 次のカテゴリからテーマを選定し開催する。

経営全般(国際競争力、規制緩和など)、原材料(含む地球資源問題)、製品(マーケット、社会環境、生活スタイル含む)、プロセス(加工、複合化、過去の技術の再評価)、先端技術(バイオ、ナノ技術など)、基礎理論(高分子：劣化、高性能、高機能)、環境、リサイクル

- ② ゴム技術総合研究所について

ゴム技術総合研究所構想の実現に向けて、世界29のゴム技術研究所の現状調査に続き、日本におけるゴム産業の位置付け、世界のゴム産業のランキング、当面する研究テーマ、人的資源など問題点を引き続き調査し、設立に向けて準備を進める予定である。

### ◎会議開催予定

会 合 名	開催回数	出席者数	延出席者予定数
<b>事業関係</b>			
通常総会	1	200	200
理事会	7	15	105
評議員会	3	20	60
名誉会員説明会	1	10	10
監査会	1	10	10
会員委員会	3	10	30
国際委員会	3	6	18
財務委員会	2	6	12
編集委員会	12	15	180
出版企画委員会	1	8	8
日本ゴム協会賞委員会	2	10	20
ゴム技術進歩賞委員会	2	10	20
優秀論文賞推薦委員会	(書面審議)		
ゴム技術有功賞委員会	2	10	20
名誉会員推薦委員会	1	8	8
オーエンスレーガー賞委員会	1	10	10
ゴム科学技術奨励金委員会	—	—	—
規格委員会	1	6	6
組織委員会	4	10	40
次期役員・評議員候補者選考委員会	—	—	—
総務・人事委員会	2	6	12
ゴム技術資料保存委員会	—	—	—
広報委員会	(書面審議)		
PDE準備委員会	6	8	48
<b>標準化部会関係</b>			
幹事主査会	—	—	—
小 計	55	378	817
<b>研究部会関係</b>			
幹事会	2	4	8
幹事主査会	2	15	30
ゴム技術シンポジウム(含む講習会・講演会)	10	35	350
衛生問題研究分科会	6	10	60
環境劣化研究分科会	4	20	80
ゴム練り研究分科会	4	15	60
分析研究分科会	4	15	60
配合技術研究分科会	4	20	80
成形加工技術研究分科会	4	10	40
トライボロジー研究分科会	4	15	60
接着研究分科会	4	20	80
金型研究分科会	4	20	80
新世代エラストマー技術研究分科会	4	30	120
力学的性質研究分科会	4	15	60
ゴム製品設計力学研究分科会	4	10	40
免震用積層ゴム委員会	4	20	80
小 計	68	274	1,288
総 計	123	652	2,105

# 平成15年度予算

自平成15年4月1日 至平成16年3月31日

社団法人 日本ゴム協会

## 1. 公益事業 (単位：千円)

科目	金額	備考
会費収入	46,630	
賛助会費	26,770	35×765
正学生会会費	19,620	9×2,093, 4.5×117, 15.6×6, 10.8×15
学生会会費	190	4.5×44
入会金	50	0.5×100
寄付金	320	優秀論文賞, 進歩賞
広告料収入	11,970	945×10, 1,260×2
バックナンバー収入	100	
本部行事収入	4,320	
年次大会収入	1,370	6×150, 5×50, 広告料220
夏期講座収入	1,460	26.25×50, 5×30
討論会収入	1,490	6×200, 5×50, 広告料40
研究部会収入	11,350	
委員会収入	2,350	
行事収入	9,000	
業務受託収入	2,700	関東支部2,000, フォーラム600, 衛生100
雑収入	1,500	
収入合計	78,890	
事業費	16,850	
会議費	1,000	
表彰費	300	
普及費	2,300	東海100, 九州200, 団体手数料400, 広報委1,200など
旅通信費	2,200	
印刷費	2,000	
消耗品費	700	
事務所費	300	
支部費	4,500	
本部行事費	3,550	九州支部会議室補助金48を含む
年次大会費	4,000	
夏期講座費	1,300	
討論会費	1,400	
雑誌費	1,300	
編集費	13,800	
印刷費	1,800	
送付費	8,000	
原稿料	3,000	
研究部会費	1,000	
会議費	8,800	
行事費	2,800	
人件費	6,000	
職員給料	29,820	
職員手当	19,000	
厚生費	5,600	
通勤費	3,600	
中退掛金	950	
事務費	670	
事雑費	2,700	
国際交流費	500	
公租公課	900	ISO協力金200, IRC補助金200×2, 国際委300
予備費	1,200	
	320	
支出合計	78,890	

## 2. 収益事業 (単位：千円)

科目	金額	備考
出版物収入	4,260	
ゴム技術の基礎	2,380	3,969円×600冊

ゴム試験法	140	14,175円×10冊
ゴム工業便覧	1,320	33,075円×40冊
ゴム用語辞典	420	4,252円×100冊
広告料収入	0	
会員外購読料	1,500	
収入合計	5,760	
出版費	1,190	
印刷費	0	
会議費	100	
通信費	100	
事務所費	600	
消耗品費	30	
発送費	260	
旅費	100	
原稿料	0	
人件費	4,500	
職員給料	3,000	
職員手当	900	
厚生費	500	
通勤費	100	
雑費	70	
支出合計	5,760	

## 3. 特別賛助会費

すでに皆様ご承知のとおり、来る2005年(平成17年)10月、パシフィコ横浜において国際ゴム技術会議を開催することが決定されました。

国際ゴム技術会議の開催経費につきましては、国際ゴム技術会議組織委員会において、現今の経済情勢に鑑み最小限必要な経費を下記のとおり試算いたしました。

(単位：円)

収入見込		支出見込	
国際ゴム技術会議基金	10,000,000	国際ゴム技術会議総経費	80,500,000
助成金	6,000,000		
登録料	25,300,000		
(不足額)	39,200,000		
計	80,500,000	計	80,500,000

\*前回IRC 95 KOBE(平成7年)の総経費93,793,045円

必要経費につきましては、元来、基金、助成金および登録料で賄うべきものでありますが、会場費や付帯設備費、各種印刷費、業務費などの経費がかさみ、前記収入のみでは到底賄いきれず、なお国費の援助を期待することも難しい情勢にあります。

ここに、本会議の主催団体である日本ゴム協会では、国際ゴム技術会議の開催目的を達成するため、賛助会員ならびに関連業界からご協力を仰ぐことにいたしましたので、この段ご理解くださいまして、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

つきましては、ご協力の一部を特別賛助会費として1口15,000円で、1社1口以上を2年間(平成16~17年度)に限りご賛同賜りたく、お願い申し上げます。

# 平成15・16年度役員

社団法人 日本ゴム協会

## 平成15・16年度役員の選任

理事(会長)	山口 幸一					
理事(副会長)	井上 隆		増永 幹夫		高橋 修一	
	(圓藤紀代司)					
理事	石川 泰弘	小松 啓祐	佐藤 壽彌	佐藤 壽彌	佐藤 壽彌	佐藤 壽彌
	佐藤 美洋	竹中 克彦	松中 宏至	松中 宏至	松中 宏至	松中 宏至
	宮林 敏男	隠塚 裕之	山田 英介	山田 英介	山田 英介	山田 英介
	池田 能幸	兄玉 裕治	中原 章裕	中原 章裕	中原 章裕	中原 章裕
	山田 聿男	井上 芳治	古川 睦久	古川 睦久	古川 睦久	古川 睦久
監事	濱田 裕		横井 一		下川 幸男	

幹事 (28名)	阿部 直樹	網野 直也	石口 康治
	伊藤 政幸	梅本 博之	小川 哲功
	押田 英隆	片岡 和人	菊池 裕
	桑畑 友孝	小林 均	小林 幸夫
	近藤 武志	坂井 和彦	柳田 宏
	新谷 正伸	角村 真一	村主 学
	仙田 和久	高木 和久	高田 志和
	飛田 雅之	戸堀 博行	中村 勉
	西本 右子	長谷川 淳	棟田 明博
	鰐淵 隆		

## 平成15・16年度評議員選挙結果

評議員	関東	青山 英雄	浅田 泰司	石田 宏昭
		市川 龍夫	大石 不二夫	大内 康平
		大橋 守昭	大柳 康	奥山 通夫
		小野 勝道	加藤 政雄	影山 邦夫
		君島 二郎	木村 都威	草野 一彌
		小池 武人	佐々木 康	徳田 隆弘
	東海	西 敏夫	橋本 欣郎	平川 弘
		深堀 美英	藤瀬 学	古浜 暉英
		前田 守一	松田 惇也	松原 光一
		水本 清文	村上 謙吉	山田 古隆
		湯地 克己	吉田 淑則	吉村 信哉
		吉本 敏雄	渡辺 茂隆	
関西	青木 秀暁	伊丹 良彦	伊藤 俊和	
	稲垣 慎二	稲葉 弘	井上 聡一	
	内山 吉隆	亀井 清弘	川端 誠治	
	米屋 正治	竹村 泰彦	宮田 亮	
	荒木 紀久雄	石割 和夫	小田 文生	
	木村 健造	粕谷 信三	佐藤 隆夫	
九州	塩山 務	柴田 達三	白石 恒裕	
	高橋 淳一	滝野 寛志	十川 敬二	
	中嶋 正仁	中出 伸一	中村 明比古	
	橋本 明	平川 米夫	藤井 和廣	
	藤木 萬平	藤田 幸三	増井 義彦	
	松原 宏長	山岡 重厚	山本 義彦	
横田 素行				
大坪 弘文	亀澤 光博	古賀 幹雄		
坂本 明彦	藤 道治	横山 哲夫		

### (2) 東海支部 (37名) 支部長 山田 英介

副支部長	隱塚 裕之	後藤 秀且	村上 公洋
常任幹事 (16名)	青山 裕充	石井 明彦	伊藤 敬人
	岩井 智昭	岡村 誠治	奥 淳一
	尾之内 千夫	神谷 浩二	川北 元也
	川治 信介	川瀬 正人	北川 則昭
幹事 (17名)	杉本 正俊	鈴木 譽久	野村 正宏
	飯田 浩史	泉田 昭	金谷 松一
	河部 一成	木全 明典	金谷 浩史
	杉森 裕	鈴木 好彦	曾根 一祐
	長野 悦子	濱田 俊一	福島 益雄
	福森 健三	古庄 眞澄	松田 英輝
	山口 知宏	渡辺 和昭	

### (3) 関西支部 (51名) 支部長 池田 能幸

副支部長	中原 章裕	長谷川 博一	山田 聿男
常任幹事 (18名)	青山 泰三	浅田 信行	池田 裕子
	井上 弘	上田 裕清	圓藤紀代司
	奥村 次郎	岸根 充	国武 典彦
	児玉 総治	小林 茂夫	伊永 孝
	高田 俊通	滝口 敏彦	中村 博信
	福永 精一	藤本 知士	松木 丈人
幹事 (28名)	相羽 誠一	上利 泰幸	石原 修
	一角 泰彦	伊藤 孝弘	上田 善晴
	浦上 和人	浦山 健治	木本 正樹
	国友 俊雄	佐用 浩一	橋 博之
	谷口 政晴	中川 盛雄	永田 員也
	長谷 朝博	中村 吉伸	西川 信二郎
西野 孝	野呂 明生	福原 啓聡	
三浦 大治	三隅 好三	茂原 忠男	
安松 一二三	山野 不二男	柚木 昭	
吉見 健			

## 平成15・16年度支部役員

### (1) 関東支部 (53名) 支部長 佐藤 壽彌

副支部長	伊藤 眞義	川崎 弘志	北川 裕一
常任幹事 (20名)	三島 孝		
	五十野 善信	井上 隆	大武 義人
	大橋 潤二	長田 義仁	恩田 伸一
	加藤 次郎	川面 哲司	桑山 力次
	佐藤 美洋	後藤 眞	佐藤 雄治
	杉谷 和俊	島崎 光雄	末安 知昌
細谷 潔	鈴木 勉	平田 靖	

### (4) 九州支部 (30名) 支部長 井上 芳治

副支部長	太田 幹人	河岡 日出夫	古川 睦久
常任幹事 (11名)	安倍 徳博	箕木 宏和	大坪 弘文
	大崎 徹郎	吉川 博	下川 幸男
	竹下 剛	星野 栄蔵	水谷 憲明
	森 良一	吉海 和正	
幹事 (15名)	愛川 倫明	石橋 剛	五十川 政文
	梶 隆彦	梶野 秀則	亀澤 光博
	小無田 茂	堺 敏明	塚本 孝二
	寺川 恵	西村 克己	原 悟
平井 孝義	平岡 教子	御手洗 邦徳	

# 各賞の表彰

社団法人 日本ゴム協会

## ☆第15回日本ゴム協会賞

受賞業績：E P D M / 樹脂アロイの開発

受賞者：三井化学株式会社

川崎 雅昭氏

仲濱 秀齊氏

東條 哲夫氏

三島 孝氏

## ☆第41回ゴム技術有功賞

受賞者：川崎 仁士 氏(元 評議員)

氏は、昭和36年大阪府立大学工学部応用化学科を卒業、昭和38年岡山県工業試験場(現 岡山県工業技術センター)に入所、以来一貫してゴム工業の生産技術の発展に努められ、自ら研究開発で得た成果を公開してゴム工業界に技術支援されてきた。主な研究開発事例としては、ハードクレーの補強機構や白色充てん剤の表面改質剤に関する研究開発、未加硫ゴム生地のスコーチと湿度の関係、バラストマットやスラブマットの生産に係る加硫ゴムの簡易再生技術の開発、フッ素ゴムの再生、スリーピースタイプの公式ゴルフボールの開発、耐アルカリ性に優れたニトリルゴムの調製、耐候性に優れたゴムと亜鉛引き鋼板の接着などがあり、これらの技術は企業で応用・実用化され、関係企業から氏の技術力、指導力は高く評価されている。

さらに、岡山県工業技術センター在職中、旧福山ゴム研究会と岡山ゴム研究会を統合し中国ゴム技術研究会設立に尽力され、合わせて研究会会員企業の若手研究者育成にも努められ、企業から高い評価を受けている。他に、ゴム用語辞典、フィラー活用辞典、フィラーハンドブックなどの分担執筆、ゴム協会誌に論文、総説、資料を発表、関西支部講演会、ゴム技術シンポジウムの講師なども務められゴム工業の発展に貢献された。

ゴム関連団体での活動は、当協会としては昭和54年～平成6年まで関西支部幹事、常任幹事、平成7年～8年

まで本部理事、平成9年～12年までは本部評議員を歴任され、支部・本部活動に貢献された。中国ゴム技術研究会では発足以来役員、名誉会員をされ、講演、会報などでゴム技術の養成に尽力されている。また、化石燃料の枯渇、地球温暖化の問題から、天然ゴムの重要性が増大している今日、国の支援を受けてマレーシアゴム研究所と岡山県工業技術センター間で共同研究を立ち上げ、以来当センターは天然ゴムに関する技術情報入手の窓口的な役割を果たしている。

したがって、氏の功績はゴム技術有功賞に相応しいものと認められる。

## ☆第50回優秀論文賞

受賞論文：有機めっき処理金属とゴムとの直接加硫接着に関する研究(第1報～第3報)

受賞者：岩手大学

龔 蓬氏

森 邦夫氏

平原 英俊氏

大石 好行氏

受賞論文：シリカ配合およびカーボン配合SBRの摩擦機構に関する研究(第1報～第3報)

受賞者：横浜ゴム㈱

網野 直也氏

金沢大学

内山 吉隆氏

岩井 智昭氏

前田 真人氏

## ☆第58回ゴム技術進歩賞

研究課題：柔らかくかつ反発弾性最大のエラストマー

受賞者：東洋ゴム工業株式会社

箕内 則夫氏

## ☆第13回ゴム科学技術奨励金贈呈

研究題目：不規則網目構造の粘弾性緩和を利用した高制振性エラストマーの開発

受領者：京都大学

浦山 健治氏

糴谷 信三氏